



はじめに

小児医療は、新生児から思春期までの内科系疾患・外科系疾患全てに対応する広大な診療分野です。より充実した医療を提供するため、当院では小児に関わる他科の診療科・コメディカルと連携し合って診療に取り組んでいます。中でも小児科では予防接種や乳幼児健診など、子どもの健康管理・健康増進を図るとともに、地域の救急医療の中核病院の小児科として24時間・365日体制で小児の救急患者さんを受け入れて

います。一方で、非常に広範囲な小児医療分野に対応できるよう、内分泌・代謝疾患、腎疾患、アレルギー疾患、感染症、神経疾患、心疾患など各分野のスペシャリストの小児科医が連携し、高度かつ専門的な医療を提供しています。また日本小児科学会の認定研修施設として全国各地から研修医やレジデントを受け入れ、若い医師たちの卒後臨床教育にも力を注いでいます。

スタッフ紹介

- 久保 俊英(院長)
- 古城 真秀子(医長)
- 清水 順也(医長)
- 井上 拓志(常勤医師)
- 森 茂弘(常勤医師)
- 樋口 洋介(常勤医師)
- 藤永 祥子(常勤医師)
- 土屋 弘樹(常勤医師)
- 江淵 有紀(常勤医師)
- 越智 元春(レジデント)
- 西村 佑真(レジデント)
- 難波 貴弘(レジデント)
- 原 成未(レジデント、産休中)
- 金谷 誠久(非常勤医師)



小児科病棟(6B)スタッフと

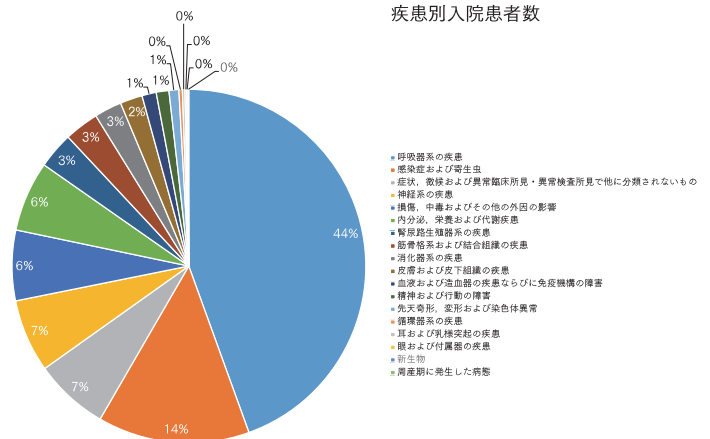
診療内容

小児科では救急医療と高度専門医療を2本の柱とし、あらゆる小児疾患に対応しています。その中で特に特徴ある分野についてご紹介します。

診療実績 (平成30年度)

入院患者総数	2425人 (平均在院日数は8.2日)
外来患者数	1日平均 96.8人
救急外来受診患者数	年間7393人 (うち救急車で来院は690人)

疾患別入院患者数



小児救急医療

地域の小児救急医療中核病院として、24時間・365日体制を敷いています。岡山市の二次応需輪番体制の半数近くを担当していますが、実際には岡山市外からも含め二次応需日以外の日も多くの救急患者さんを受け入れています。岡山市で24時間小児科当直医がいる総合病院は意外に少なく、近隣の総合病院からの重症度の高い患者さんの転院依頼もよくあります。時間外の一次診療については、岡山市休日夜間診療

所(当科スタッフも定期的に出務しています)や、#8000などの電話相談を利用していただくことで当直医の負担が軽減され、より重症度の高い患者さんの診療に専念できるようになります。また、夜間救急外来には地域の開業医の先生方が定期的に応援にきてくださっています。新生児医療については新生児科が独立して診療体制を敷いており、専門診療が必要な外科疾患については小児外科が24時間対応しています。



小児科外来スタッフと

専門医療

内分泌・代謝疾患

低身長、糖尿病、甲状腺疾患、副腎疾患など小児内分泌疾患、先天性代謝異常症のすべての疾患を診療しています。成長障害から発見される虐待児や近年増加している小児の生活習慣病も栄養科と連携して食事指導しています。また岡山県の新生児タンデムマススクリーニングの中核病院として、スクリーニングで発見される先天性甲状腺機能低下症やフェニルケトン尿症などの25疾患の精密検査とその後の治療を行っており、総合病院の強みである移行期医療の支援として周産期センターと連携し内分泌・代謝疾患女性患者の妊娠・出産のフォローを行っています。希少疾患・難病と言われている先天代謝異常症のうちライソゾーム病(ファブリー病、ムコ多糖症、ゴーシェ病など)に対して疑い症例の相談、酵素補充療法を行っています。

腎疾患

当院は、日本腎臓学会の研修施設に認定されています。乳幼児健診や学校検尿での有所見患者さんの精密検査フォローはもちろん、ネフローゼ症候群、急性・慢性腎炎、急性・慢性腎不全、遺伝性腎疾患、電解質異常、先天性腎尿路奇形、尿路感染症など、ほぼすべての小児腎関連疾患の診断治療・管理を、小児外科、腎臓内科、移植外科、臨床検査科とも密接に連携しながら行っています。岡山県内では数少ない、小児の腎生検や在宅腹膜透析管理、腎移植前後の長期管理を施行している施設です。

アレルギー疾患

乳児～小児のアレルギー性疾患を対象に診療を行っています。

- 気管支喘息:急性期発作の治療、発作コントロールの難しい患者さんの対応
- アトピー性皮膚炎:皮膚科と連携して原因の検索
- 食物アレルギー:原因食材の特定と減感作療法
- アレルギー患者さんに対する予防接種を行っています

神経疾患

けいれん性疾患(熱性けいれん、てんかん)、中枢神経感染症(脳炎、脳症、髄膜炎)、脳性麻痺、先天性神経疾患(染色体・遺伝子異常、先天代謝異常症)、発達障害(自閉症、ADHD)などの患者さんの診療をしています。中でもけいれん性疾患は小児では非常に多く、小児救急医療の代表的疾患でもあり、年間1000件以上の脳波検査を行い、小児神経専門医、てんかん専門医が中心となり診療しています。近年新しい抗てんかん薬が認可・発売されており、これまで難治であった患者さんがよりよい生活を送れるようになることが期待されています。

臨床教育

当院小児科は日本小児科学会の認定臨床研修施設に指定されており、岡山大学病院を基幹施設とする小児科専攻医研修プログラムの研修連携施設(支援施設)として、常時専攻医研修を受け入れています。小児科のみならず、新生児科、小児外科をローテートすることで、幅広く小児医療の臨床経験を積んでいます。分野によってはサブスペシャリティ専門医研修も可能です。入院患者さんの診断・治療方針の科内カンファレンスを週に3回行うほか、医長回診、他科との合同カンファレンス、英語論文抄読会、PALSシミュレーショントレーニング、レントゲンカンファレンスなど毎週定期的に行って研鑽を積んでいます。2020年度からの初期研修医には4週間以上の小児科研修が義務付けられますが、当院では初期研修医制度発足時

から、小児科と外科とは臨床医として最低限研修すべき分野であるとの考えのもと、1か月ローテートを必須プログラムとしておりました。将来成人科へ進む研修医にとっても意義ある研修となっていると信じています。また卒業教育だけでなく、岡山大学医学部の選択性臨床実習の一環として、新生児科、小児外科とも共同で毎年多数の学生さんを受け入れています。それとは別に、年に1回、全国の医学部4~6年生を対象とした学生セミナーを開催し、診療現場を体験してもらうことで小児医療の魅力を若い世代へ伝えていきます。また、他科の医師やコメディカルも参加可能な各種研修会を行って知識・技術の研鑽に励んでいます。

研究活動

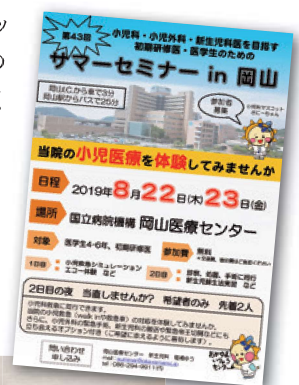
胎児から始まり、新生児期~小児期~思春期を経て、次世代を生き育てる成人期の心身の健康までリプロダクションのサイクルを連続的・包括的に支援する医療を成育医療と言います。小児科は成育医療推進研究室に所属しており、新生児科、産科、小児外科、コメディカルとも協力しながら多方面にわ

たる分野の臨床研究および治験等に柔軟に対応しています。また救急医療への取組みも研究対象としています。救急医療と研究活動の両立は困難ではありますが、各自年1回以上の学会発表と論文発表を努力目標として取り組んでいます。

おわりに

小児科医は常に、子どもたちの幸せな将来を見据えて診療を行っています。健康を守り、病気を治すことはもちろんですが、子どもたちが心豊かな生活を送るための諸問題すべてに対応する総合的な診療科でもあります。子どもたちの恐怖感を少しでもやわらげるため、看護師・保育士はかわいいスクラブやエプロンを着用して子どもたちに接しており、入院生活でも季節感を感じてもらうため、毎月お楽しみ会を企画したり、壁や窓の様様替えを行い、子どもたちに笑顔を届けてもらっています。

お楽しみ会には小児系マスコットのさにーちゃんも登場しますのでぜひ小児病棟に遊びにきてください。子どもに関することはいつでもどんなことでもご相談ください。



小児系マスコットキャラクターさにーちゃんと